七、參考書

此の論傳の主なる參考書は左の如し、(一)、會津藤樹學道統譜――及び會津外藤樹學道統譜――三浦親馨撰――(二)、同上補記――齋藤一馬撰――(三)、藤樹先生全書――志村巳之助編――(四)、藤樹先生全集――筱原元博編（此書は未だ之を見ず、江州青柳村小川喜代藏氏に依賴して書中の岡山先生に關する事項を知り得たり）――(五)、「陽明學」雜誌第八、九、十の三號――笠井勘、小川喜代藏両氏共撰の淵岡山傳（有益なる材料に富めり）及其遺文等――(六)、藤樹先生行狀聞傳――志村仲昌撰――(七)、藤樹先生年譜――河田剛撰――(八)、淵岡山先生書簡――(九)、閑散餘錄――南川維遷著

三百年前日本と臺灣との經濟的關係に就きて

文學博士　內田銀藏

往古我が邦人は臺灣をタカサゴと呼びたり。或は高山國、或は高砂、或は塔伽沙古などゝ書す。元和中、日本に在留せる英吉利人の書きたるものにはTacca Sanga若しくはTaccisangaと見ゆ。(例へば『コックス日記』一六一五年十月三十日及一六二一年三月八日の條)。現今臺灣鐵道縱貫線南方の終點にして西海岸南部の要港なる打狗(タカウ)の邊には、もとタアカウ社と稱する蕃族占居せり。それよりして港を打狗港(タカウカン)といひ、其の北角に聳え、海拔一千百六十七尺、遠望すれば島の如く、他陸の煙霧に沒する時にもなほ識別し易く、此の海岸に於ける最要の目標たる山を稱して打狗山(タカウザン)と稱するに至

れり。打狗山は一に打鼓山とも書す。而して此の打狗山(タアカウソア)を轉訛してタカサゴと呼び、最初は之を以て其の附近、即ち南部の一地方を指す名稱として用ひたるならんが、既にして全島を指示する名稱となりしものゝ如し。

臺灣の地理、歴史、土俗等に關し深奥なる研究を遂げられたる伊能嘉矩氏は、明治三十五年出版の『臺灣志』卷一、沿革志、第一章地名沿革に於て、タカサゴに關し、「この地名は、三百餘年前、臺灣に往來したりし、我が日本人に由りて附せられたるなり、蓋し此の時に於ける、日本人の重なる集中地の一は、西部なる今の打狗の邊にして、「タコサン社」といへる土蕃部落(ペイポ族)の在る所たりしより、其の音の宛も國音「タカサゴ」と相通じ、且つ地の風光明媚なる、我が高砂浦の形勝を聯想せしむるに足りしを以て、爾かく名づけたるものなるべし、されば初は、單に臺灣の西南一部に與へられたる稱呼にして、全島の地名にはあらざりしなり、又其の地勢、南北の中部を貫きて、巍峩の連峯、高く天を劈く如き、奇觀に富めるに因み、更に近音なる「高山國」の文字をも當てたることあり」と說かれたり。伊能氏は其の後、明治四十二年出版の吉田東伍氏『大日本地名辭書』續編の臺灣の部を擔任執筆せられたるが、其の「高砂(タカサゴ)」の項には、「古く日本人の與へし稱呼にして、按ずるに、往時、臺灣に往來せし日本人の重なる寄航地の一は、南部地方の沿岸にして、今の打狗港は原とタアカウ社といへる蕃地名より出で、漢族に依り轉訛せられて、打鼓山(タアコオサン)社と呼ばれしを以て、宛も其の音の國音(○本書「國有」に作る誤植と思はるゝを以て今之を訂す)タカサゴに近似し、而かも地の風光明媚なる亦我が高砂浦の形勝を聯想せしむるものありしに因み、之を假りて轉訛を强制せしものゝ如し、されば最初は單に此南部の一地方の稱呼として用ひ

られしならんも、爾後全島の地名に慣用せらるゝに至れり」云々とあり。予が前に試みたる說明は大體此の伊能氏の說に基き、同氏が『大日本地名辭書』續編、臺灣の部の他の諸項に於て記されたる事實及考說をも參考して述べたるものにして、予の見解は、要するに伊能氏に依據するものなり然れども細かなる點に於ては、伊能氏と少しく說き方を異にしたしと思ふ。

伊能氏は今の打狗の邊が三百餘年前に於ける日本人の重もなる集中地の一なりと云はれたり是には定めて論據あることならんが予は未だ之を詳にせず管見にては臺江（タイカ）（臺南海岸の內港）未だ壅塞せず、臺灣即ち今の臺南が安全にして且つ船附き至て便利なる港なりし當時に在りては、日本人の最も多く往きし地は、打狗には非ずして、臺灣即ち今の臺南なりしならん。然るにも關せず我が邦人臺灣の名よりもタカサゴの名を熟知し、之を以て全島の名稱とするに至りし所以は如何。蓋し現今臺灣鐵道縱貫線北方の起點なる基隆港地方の主山たる雞籠山（キイルンソアン）（今は基隆山と書す）と打狗の打狗山（タアカウソアン）とは、臺灣島に赴き、又は其の附近を航行するものゝ先づ氣附きたる二大目標なりしならん。我が邦人は島の北部に於ては第一に雞籠山を以て目標とし、島の南部に於ては第一に打狗山を以て目標としたることなるべし。而して我が邦人の北部なる雞籠港（基隆港）又は淡水港に到りて貿易を營めるもの固よりこれなきに非ずと雖、南部は北部よりも一層早く開け、貿易の利また南部に於て多かりしなるべきを以て、邦人は夙に南部に着目し、そこに向つて渡航するもの多く、從て其の南部の海岸に於ける第一の好標的なる打狗山（タアカウソアン）の名は、先づ邦人の耳に熟し、自然之を以て南部一帶の地を指す名稱とし、それより終に全島の名稱とするに至れるものなるべし。早き頃日本より臺灣への航路

に就きては、伊能氏『臺灣志』第一卷第二章割讓以前の臺灣、第四臺灣に於ける日本人の事業の條に記して曰く「當時日本より臺灣に航せし海路は、二個の方向を取りたるものゝ如く、一は九州の西岸より、舵を南西に向け、鷄籠島を目標として南に進み、今の基隆・淡水を第一の根據として、更に西南に折れ、一は南琉球を經過して、臺灣の南岬を西に廻り、更に北に折れて、今の打狗・臺江（今の臺南海岸）を第一の根據とし、それより共に澎湖を根據として、南部支那一帶の沿岸に侵略を企てしものゝ如し」と。然らば其の第二の航路を採れる場合には、臺灣即ち今の臺南に到る前に先づ打狗山（タアカウツアア）を認めたることならん。

打狗山（タアカウツアア）を轉訛してタカサゴとしたるは、要するに日本人が唱へ易き樣になまりたるに外ならざるべし。之に高砂といふ文字を宛て用ひたるは、蓋しアマカウに天川の文字を用ひたる類のみ。當時の打狗港の光景が我が高砂浦を聯想せしむるものありしや否やは、予未だ之を詳にせざれば、何とも云ひ難し。高山國の文字を塡用したるに就いては當時の日本人臺灣全島の地勢を察知し、中部を貫きて渾峯高く聳ゆるに因みたるなりとまでは云はずともよからんと愚考す。高山の高は打狗山（タアカウツアア）のタカを表する爲め假り用ひたるものと云ふだけにて十分ならん。

三百餘年前、我が邦人は主として何の爲めに臺灣に赴きしか、それに就きては直ちに二つの目的ありしことを考へ得べし。第一には他の地方に赴く途次寄港すること、又は他の地方に於て活動する爲め其根據地とすること、第二には臺灣島それ自からに存する富源を目的とし、其の產物を得んが爲めに往くこと即ち是れなり。然れども此二つのこと以外に邦人を臺灣に引附けし事情は、當時果してこれなかりしか。三百餘年前に於ける臺灣

が日本に對し有したる經濟的關係は、第一に臺灣が海外渡航の日本人の中間寄港地、若しくは其の海外活動の一根據地たりしこと、第二に臺灣それ自からが產したる鹿皮、砂糖等を日本に供給したること、此の二者だけに止まりし乎。否予輩を以て之を見れば、其の外に尙ほこれあり、當時臺灣には既に南方支那人の本土より渡りて留住せるものあり、既にしてまた和蘭人及西班牙人の之に據るあり、寬永鎖國の少し前頃には、臺灣へ行けば臺灣自からの產物を求め得るのみならず、支那本土の物產、及西洋の貨物をも此の地にて求め得、又我が邦の產物を臺灣土人のみならず、在住の支那人・西洋人にも賣りて利益を博することを得たるなり。臺灣との貿易關係は、單に臺灣土人との交易に非ず、寧ろ主として支那人及西洋人との貿易なりしなるべし。是れ蓋し臺灣が當時我が邦人を引附けたる一の事情にして、此の點に於て當時の臺灣に於ける貿易は、或る程度まで當時の天川（亞媽港）などに於ける貿易と相似たる性質を有したるものならん。

西川如見の『增補華夷通商考』大寃の條には、大寃或は臺灣、又二名あり、東寧・塔伽沙谷と記し其の土產は「白砂糖・鹿皮・山馬・獐皮・木綿・西瓜・藥種少々・鳥獸・米・南瓜」なりといひ、「右の類唐船に積來る也、是を大寃船と云」といへり。同じ人の書ける『長崎夜話草』には「塔伽沙谷は唐土東南の海中に在島國にて本は國主もなく、農民は甘蔗を多く種て砂糖を造り、山中の民は山童とて猿の如くなるものなるが、明幕鉾を持て麋鹿をつきとりて其肉を食とし、其皮を市に持出、酒食にかへて妻子を養ふをもつて產業とす、又女人は能木綿を織て、家毎に二百端三百端を常に貯へ積置なを分限とす、煖國にて寒氣なき國なるゆへ一年兩度の耕作にて米多き國なり」と記せり。又新井白石の

『外國通信事略』の後に附せる「中華并外國土產」には、

東寧（塔伽沙古といふ、今臺灣ともいふ、日本より六百四十里程）

此國より商舶來る

土宜

白砂糖　氷砂糖　黑砂糖　鹿皮　山馬皮　獐皮

といひ、京都帝國大學文科大學國史研究室所藏の寫本『長崎港異國押役人附』と題するものにも、

東寧　日本より六百三四十里ほど

土產　白糖　黑糖　鹿皮　山馬皮　小人皮

とあるを見る。此等に據るときは、臺灣島は往時主として砂糖及鹿皮の產地として我が邦人に知られしことにして、而して此等の文のみを見るときは、往時我が邦人が臺灣より求め得たるものは、拓殖未だ甚だ進み居らざりし該島の土產たる鹿皮及砂糖の類に限られし樣にも考へらるべし。然れども事實は決して然らざるなり。

大正五年四月予臺灣に赴き、五月上旬京都に歸る。其の後間もなく五月十三日三浦・喜田兩博士及讀史會々員諸氏と共に近江國栗太郡蘆浦の觀音寺に至り、所藏の文書記錄等を見ることを得たり。其の展觀の際、喜田博士は或る箱の中にありし多くの書類中より一綴の舊記を取出し予に示さる、受けて之を見れば『唐土天竺ヨリ日本ヘ渡物覺・從ニ日本一唐ヘ渡物覺』と題するものなり。臺灣より歸りて間もなき折のことなれば、予の先づ注意せしは、其の覺書の中、多加佐古（タカリゴ）の條なりき。其の文左の如し。

多加佐古　五百里、此國北の端たんすいと云所呂宋南蠻人住宅ゝ南の方たいわんと云湊ニ日本人商買ニ渡、おらんだも住宅ス、大明近所なれば糸卷物ノ類此所ニテおらんだ買集ゆへ天竺南蠻物も在レ之、地ニ在レ之物は鹿皮也、

一日本よりかの地持渡り候物、銅鐵やくゐん其外日本物少宛、但是ハ多加佐古のものに賣申候ためにては無之候、大明人に賣申候爲にて候、

從日本銅鐵やくわん渡、但地ノ物余不買取、大明人買也、

文簡にして盡さずと雖、臺灣貿易の性質一讀して直ちに察知せらる。予は此の文を讀みて頗る興味を感ずると共に、此の覺書が如何にも能く『異國渡海船路積』（終りに寛永拾四年八月朔日とあり、予が所藏の寫本は表紙に「洋記」と題し其の下に「異國渡海船路積」と注記す）と似たることを認めしが故に、其の後『異國渡海船路ノ積』を檢したるに、果して粗々同一の文あり、即ち左の如し。

鷄頭籠（タカサゴ）　此所先年亥年より初て御朱印舟參候、五百里、

一此所北ノ端たんすいと申處に呂宋之南蠻人居申候、南ノ方たいゐんと申湊に日本人商賣に參候、おらんたも住宅仕、大明に近く御座候に付、糸卷物之類、此所に而買申候、おらんた居申候付、天竺南蠻物も御座候、鷄頭籠之地に有物鹿皮迄にて候、

觀音寺舊記の文意、是と相對照して一層明瞭となるを覺ゆ。但し予は手許に『異國渡海船路積』を所持せるも、觀音寺舊記を見る迄は、特に其「タカサゴ」の條に注意せざりしなり。

今より凡そ三百年前に於て、臺灣が單に鹿皮及砂糖を我邦に供給せしのみに止まらず、支那本土の生絲及絹織物、歐羅巴及印度の珍奇なる產物も亦此の島を經由して我邦へ輸入せられたること、幷に我が邦人が臺灣に輸出せし銅鐵等の貨物は臺灣土人の需要を充たす爲に非ず、寧ろ主として在留の支那人によつて買はれ、恐らく更に他へ再輸出せられたるべきことは、觀音寺の舊記を見ずとも、『異國渡海船路積』を見たる人は、忽ち想察せ

ることならん。又觀音寺の舊記を見ず、『異國渡海船路積』を讀まずとも、他の臺灣に關する和漢洋の史料、或はそれ等に基きて書かれたる內外學者の著書論文の何れかに據りて、既にその事に氣附かれし人もあるべし。又何等の史料、著書論文を讀まずとも、臺灣の地、支那の本土に近く、支那の產物を茲に持來ることは容易にして、而して支那の本土よりは取締嚴重ならざる故、貿易には却て便宜ありしなるべきこと、また和蘭人及西班牙人臺灣に據れること等より推して、此の位のことは直ちに氣附かるゝ聰明の人も或はこれあらん。然れども予自からは臺灣に赴きて後、讀史會の諸氏と共に近江の觀音寺に到り、喜田博士發見の舊記を閱して始めて此點に想ひ到り、往時の高砂貿易が天川貿易と性質を同じくする所あることに氣附きしなり。予が此の讀史會の大會に於て此の題目に就き述ぶるは、右の如くにして啓發の益を得たることを謝せんと欲するに外ならず。

（追記）以上は大正五年十二月九日京都帝國大學學生集會場に於て開催の讀史會大會に於ける講話の草案に多少の增補訂正を加へたるものなり。今補訂を試るに當り、Campbell氏の'Formosa under the Dutch described from Contemporary Records'（ロンドン一九〇三年刊行）五一—六〇頁に載せたる'Short account of the Chinese trade, to be laid before the Governor-General and Councillors of the United East India Company'（一六二九年二月十日Pieter Nuytsが Zeelandiaにて書けるもの）を見るに、其の中に左の文あり。

"From Tayouan and Formosa Your Excellencies' money is sent by Chinese junks to the agent of the Company, or any other reliable merchant in China, that he may purchase such goods and wares as are in demand in *Japan*, the Indies,

or the Fatherland—these transactions being connived at by the Comboa, or Vice-roy of the province of Foxien."

また同じ報告中に、一六二七年及一六二八年（即ち我が寛永四年及五年）に於て、蘭人が臺灣より日本へ送りし生絲の價額を擧ぐ。是等も亦臺灣が日本へ輸入の支那貨物、特に生絲の一の中繼地たりしことに關する重要なる史料なり。（大正六年三月六日記す）

第十七世紀に於ける英佛同盟及び英國侵入計畫に就て

文學士　長　壽　吉

Prof. Firth, C. H. の Eng. Hist. Review に於ける多くの論文が英國革命時代研究の興味を證するが如く政治思想の變遷以外に於ても、英國革命時代の西歐維巴史、殊にその西歐諸國の外交の沿革は、興味ある研究題目と、なる事が出來る。英國及和蘭の交渉は、既に箕作博士の論文、殊に Tübingen發行の、獨文の研究（Engl.-niederländische Unionsbestrebungen. Tüb. 1891）に於て、最興味多き說明が、與へられてあるが、是英蘭交渉より、やゝ後れたる時代に於ける、英佛西三國の關係を稍特殊の方面に於て余は今爰に、多くは英國の方面より見たる資料に由て、說明しやうと思ふ。資料は之を、文中に挿記したるものゝ外、僅に Firth, C. H.- Stuart Tracts, 1603-1693. London, 1903 を、濟英中、參照したに過ぎない。當時の State Papers 以外のものに於て、（Clarendon, S.P. 等も）是に挿記したその多くは、多分東京帝國大學に、所藏せられてあるかと思ふ。

I. Englands politische Ideen. a). Religiöses-Protes-